

Kanzeryu Nob-Theatre

觀
世
流

緑泉会

Ryokusenkai

能…… 菊慈童 Kikujiro …… 杉澤 陽子

舞囃子… 杜若 Kaburabata …… 足立 禮子

狂言… 鐘腹 Kanabata …… 三宅 近成

能…… 船弁慶 Funabekki …… 鈴木 啓吾

……第2回例会……

……喜多六平太記念能楽堂……

……2013. 6.30 SUNDAY……

……PM1:00~(開場12:00)……

能 菊慈童 (きくじどう)

慈童 杉澤 陽子
遊舞之楽 勅使 安田 登
從臣 野見山光政
從臣 高橋 正光

後見 墨 敬子
津村禮次郎
地謡 菅野 貞男
藤村 答 中所 宜夫
吉留 敬高 中森 貫太
桑田 貴志 奥川 恒治

【休憩十五分】

舞囃子 杜若 足立 禮子
大鼓 柿原 光博 太鼓 梶谷 英樹
小鼓 幸 信吾 笛 栗林 祐輔

狂言 鎌腹 太郎 三宅 近成
某 三宅 右近
女 高澤 祐介
地謡 河井 美紀

仕舞 水無月破 賀茂 津村禮次郎
坂 真太郎 池上 彰悟
中森 貫太
古川 宜夫 充

【休憩十分】

判官源義経 松浦 薫
知盛ノ怨霊 静 鈴木 啓吾
弁慶 森 常好
大鼓 佃 良太郎 太鼓 大川 典良
小鼓 田邊 恭資 笛 藤田 貴寛

判官ノ從者 館田 善博
判官ノ從者 森 常太郎
船頭 三宅 右矩

後見 新井麻衣子 馬場加奈子 坂 真太郎
奥川 恒治 池上 彰悟 中森 貫太
地謡 河井 美紀 中所 宜夫
桑田 貴志 古川 充

【終了予定 午後五時頃】

2013. 6/30 日 PMI:00 (開場12:00)

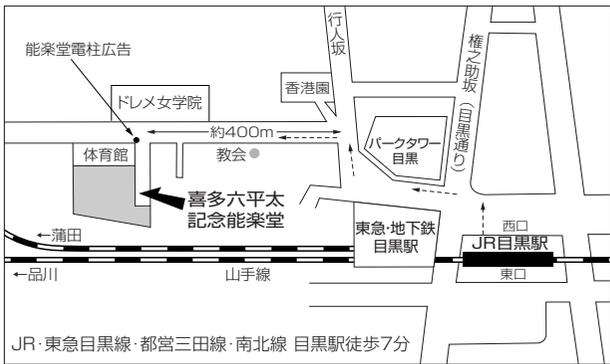
喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 品川区上大崎 4-6-9 TEL 03-3491-8813

JR・東急目黒線・地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩7分。

香港園手前の道を左折し約400m直進、杉野学園体育館手前を左に入る。

※駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮下さい。



●入場料

会員券(年4回)……一般 20,000円 学生 10,000円
1回券(当日券)……一般 6,000円 学生 3,000円

緑泉会

〒184-0005 東京都小金井市桜町2-7-18
tel. 042-386-2131 fax. 042-386-2132
http://www.ryokusenkai.net/

魏の文帝は、酈縣山より流れ出る不思議な水があると聞き、勅使(ワキ)を遣わす。勅使は泉を探し歩くうち、辺り一面に菊の花が咲き乱れる中に、一軒の庵を見つけたが、そこに一人の少年(シテ)が現れ、周の穆王に仕えた慈童だと名乗る。穆王の時代からはすでに七百年。驚く勅使。慈童は穆王より二句の妙文(具一切功德 慈眼視衆生。福聚海無量 是故応頂礼)が記された枕を賜り、その妙文を菊の葉に写したことを語る。滴る水は葉の水となり、その水を飲んで七百年もの齢を重ねることとなったのである。慈童は菊に戯れて舞い、帝の長寿を壽ぎ、また山の中へと姿を消すのであった。実は慈童は、帝の枕をまたいでしまったために酈縣山に流罪になったという経緯があるのだが、そのことに触れはせず、不老長寿を壽ぐという祝言性の高い曲に仕上げている。また小書「遊舞之楽」は、舞の演奏が変わり、より遊興性を増した演出となる。

舞囃子 杜若 (かきつばた)

自らを杜若の精であると語る女。歌舞の菩薩である業平が和歌に詠んでくれたおかげで、草木までもが成仏を得ることができた語り、業平ゆかりの冠と唐衣をまとった美しい姿で舞を舞う。

狂言 鎌腹 (かまはら)

妻に怒られ洪々柴狩りに行く怠け者の太郎は、妻に侮辱されるぐらいなら鎌で腹を切ろうとするが、氣後れしてなかなか死ねない。これを聞きつけた妻が現れ、泣いて止めようとするが…。

仕舞

賀茂 (かも) : 雲間から稲妻を光らせ、雷雨を起こして現れた賀茂神社の別雷神。五穀成就、国土守護もこの神徳ゆえと威光を現し、虚空へと上がっていくのであった。

水無月破 (みなつきはら) : 六月晦日の賀茂神社。狂女は、茅の輪をくぐり悪を祓う「夏越の祓」のことを語りつつ舞う。

鶺鴒 (うかじ) : 殺生の罪科のために死んだ鶺鴒を弔う僧のもとに現れた閻魔大王。悪人が仏果を得たのも法華経の力だと語り、法華経の功德と慈悲を勧めて消え失せる。

能 船弁慶 (ふなべんけ)

平家が滅びた後、兄の源頼朝と不仲になった源義経は、嫌疑を晴らすべく西国落ちを決意する。摂津国尼崎大物浦まで一行が到着した時、弁慶(ワキ)の薦めを受け入れて静御前を都へ帰すことになる。弁慶は静の宿を訪ねてこの由を伝えるが、静(前シテ)は弁慶の一存で来たものと誤解し、義経に直訴する。しかし義経からも重ねて都へ帰るよう伝えられ、心沈む静。別離にあたり、春秋時代に越王勾踐を助けて功を上げた陶朱公の故事を語りつつ、義経の無事を祈り舞を舞う。最後には、烏帽子を脱ぎ捨てて静は帰っていく。(中入)

義経一行が船出すると俄かに風が荒れ始め、平知盛(後シテ)を始めとする平家の怨霊たちが波間に現れ、義経一行を海に沈めようと襲い掛かってくるが、弁慶が五大明王に祈る力に、怨霊は次第に遠ざかり、波間に消え失せていくのであった。前シテの優美な舞と、後シテの豪快な長刀さばき。全く異なる人物で、前後の対比が鮮やかな曲である。感情こそは異なるものの、義経に対する執着心や、弁慶に行く手を阻まれる点において、両者に重なる部分もある。静御前は、神泉苑で舞い、天候神である龍神を感応させたという伝承の持ち主。その彼女が同行しなかったからこそ海は荒れ、そこに知盛が登場するのである。

●第3回例会……………9月16日(月・祝) 午後一時開演

能……………花筐 Hanagatani……………津村禮次郎
狂言……………佐渡狐 Satsugutsu……………野村 万作
能……………鶺鴒 Nebekitaru……………中所 宜夫